2009年度 修了

他者の受容
—E・レヴィナスの『全体性と無限』へのプロセスをたどって—

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
橋本　顕子

本稿は、エマニュエル・レヴィナスが、その著書『全体性と無限』を書くにいたるまでのプロセスをその人生の軌跡と絡み合わせつつ考察を深めている。ユダヤ人レヴィナスにとっては、みずからの戦争体験を語ることが、すなわち、倫理を語ることになったが、時間も空間も文化も遠く隔たった私たちが、彼に学ぶことができるのか。すでに、存在の彼方へ旅立った彼について、何を語りえることができるのか。

第一章では、レヴィナスが『全体性と無限』に到るまでに、彼が学んだというフッサールやハイデガーから、さらに、もう一人ユダヤ教のラビ、シュシャーニ師について論じている。リトアニア・ユダヤ教の礼節さが根ざした日常生活と、ロシア文化の取り巻くなかで、レヴィナスは、幼少期に、第一次世界大戦、ロシア革命を経験した。その後フランスのストラスブール大学に入学し、フランス語と哲学に出会い、みずからが哲学者であるための「方法」として、現象学に出会った。現象学と存在論を樹立した二人の偉大な人物フッサールとハイデガーに留学をとおして出会った。彼は、ハイデガー存在論に、深い影響を受けながらも、存在論には見いだせなかった人間性に向けての探求を開始する。迫りくる戦争、師の裏切り、第二次世界大戦への動員、ユダヤ人としての虜囚の日々、復員後の世界にあって、レヴィナスは、フッサールやハイデガーにならい現象学的方法によって、思考を練り続けた。その間、リトアニア・カウナス出身のレヴィナスは、パリのユダヤ人機関「全イスラエル同盟」の職員、のちには東方イスラエル師範学校の校長職に身を置いた。シュシャーニ師に出会ったのは、レヴィナスが、その東方イスラエル師範学校の校長職に就いた頃、学ぶ立場から教える立場へ転換した頃である。レヴィナスは、この師から、偉大な師を乗り越える方法、師弟関係について、師や弟子のあるべき姿を学ぶ。

第二章では、『全体性と無限』において展開された「無限の観念」、みずからの存在のあり方としての自己同一性、他者を受容することなどの意味が論及される。レヴィナスにとって、西欧哲学とは独我論であり、倫理とは独我論に先行する。自分の容量を越えて他者を受容することとは、贈与性と歓待性をもって他者に近づくことである。この他者との関係は、『全体性と無限』以後には、「他なるもののためにその身代わりとなる有責性」、「無関心ではありえないこと」、「愛」として語り継がれることになる。